

第1回生物多様性ふくおか戦略（仮称）策定検討委員会 議事要旨

日時：平成23年3月23日（水）13:00～15:00

場所：福岡市職員研修センター 403会議室

出席委員：

浅野委員	福岡大学法学部 ※委員長
荒井委員	九州歯科大学
小野委員	日本野鳥の会福岡
今田委員	福岡大学大学院工学部工学研究科
薛委員	九州大学大学院農学研究院環境農学部門
服部委員	ふくおか湿地保全研究会
矢部委員	九州大学大学院農学研究院農業資源経済学部門
横山委員	九州産業大学商学部観光産業学科

※敬称略

議事：

1. 生物多様性ふくおか戦略（仮称）策定検討委員会の運営について
2. 生物多様性ふくおか戦略（仮称）の策定について
3. 戦略策定にあたっての検討の進め方について
4. 現状把握・解析の方向性と方法について
5. 今後の進め方-アンケート調査等について-

配布資料：

- 資料1-1 生物多様性ふくおか戦略（仮称）検討委員会設置要綱
- 資料1-2 生物多様性ふくおか戦略（仮称）検討委員会 委員名簿
- 資料1-3 生物多様性ふくおか戦略（仮称）検討委員会運営要領
- 資料1-4 生物多様性ふくおか戦略（仮称）検討委員会傍聴要領
- 資料2-1 「生物多様性ふくおか戦略（仮称）」について
- 資料2-2 「生物多様性ふくおか戦略（仮称）」策定スケジュール（案）
- 資料3 「生物多様性ふくおか戦略（仮称）」の検討の進め方
- 資料4 福岡市の生物多様性の現状と課題（中間報告）
- 資料5 市民意識調査の進め方
- 参考資料-1 生物多様性をめぐる国の動き
- 参考資料-2 生物多様性条約について
- 参考資料-3 生物多様性国家戦略2010（書籍）
- 参考資料-4 生物多様性国家戦略2010リーフレット
- 参考資料-5 愛知目標の概要
- 参考資料-6 生物多様性地域戦略策定の手引き

1. 生物多様性ふくおか戦略（仮称）策定検討委員会の運営について

※生物多様性ふくおか戦略（仮称）検討委員会設置要綱（資料 1-1）、生物多様性ふくおか戦略（仮称）策定検討委員会委員名簿（資料 1-2）について事務局より説明し、委員の互選により、委員長に浅野委員を選任。委員長代理として委員長が今田委員を指名。

（浅野委員長）

- ・生物多様性ふくおか戦略（仮称）策定検討委員会運営要領（資料 1-3）、生物多様性ふくおか戦略（仮称）策定検討委員会傍聴要領（資料 1-4）に従って、本検討会は、次回より公開で行うこととする。また、議事録は、事務局が作成し、出席した委員の了承を得て、情報公開室にて閲覧に供するとともに、福岡市ホームページ上にて公開する（発言者名記載）。
- ・我が国では、生物多様性条約上の義務として生物多様性国家戦略が策定され、その後、生物多様性基本法が制定された。この生物多様性基本法により、生物多様性国家戦略が法定計画として策定されるようになり、地方自治体には生物多様性地域戦略を定めるよう努めることが求められた点は評価に値する。
- ・福岡県では、既に北九州市が生物多様性地域戦略を策定しているが、既定の生物保全計画に強く影響を受けた内容となっている。本検討委員会において検討を行う「生物多様性ふくおか戦略（仮称）」については、本当の意味での生物多様性の考え方を踏まえた戦略の策定を目指したい。

2. 生物多様性ふくおか戦略（仮称）の策定について

※事務局より、資料 2-1、2-2 に基づき説明。

3. 戦略策定にあたっての検討の進め方について

※事務局より、資料 3 に基づき説明。

4. 現状把握・解析の方向性と方法、及び今後の進め方について

（浅野委員長）

- ・今回の検討会は、初回の会議であり決定すべき事項は特にないので、事務局から提供された資料を参照して、自由な議論をしていただきたい。
- ・里地里山について言及している部分が多くみられるが、里地里山は「場所の概念」としてはあるものの、本市では戦後その機能は失われており、今後の検討に当って留意すべきであろう。また、福岡市が享受している生態系サービスの量（エコロジカルフットプリント）を考えると、市域内あるいは福岡都市圏で自己完結するのではなく、他の圏域との連携を重視したほうが良いと感じている。

（薛委員）

- ・事務局の資料には、福岡は、大陸や朝鮮半島に近く、文化の入口となったことが示されている。この他に、地理的な特性として、寒冷期に北方系の生物が日本に入る際の通り道になっていたこと、そして、現在は国際港と国際空港から移入種が入りやすい場所であるという点についても言及しておきたい。
- ・生態系の健全性を評価するにあたって、移入種の増減などを整理しておきたい。移入種は、特定の在来種をおびやかすばかりでなく、地域生態系全体への脅威となる可能性があることも踏まえた方がよい。

- ・また、「ハビタット」とは、生物の生息場所を指す用語であるから、資料4において用いられている「生態系（ハビタット）」という表現は改めたほうがよい。

(小野委員)

- ・野鳥の生息環境に関して、福岡市は、繁殖地、越冬地、中継地などの評価すべきファクターがあり、市域に限定した生態系の評価は難しい。この点においても、福岡市外を含めた他の地域と連携する視点が大切ではないだろうか。生態系については、市域を越えて広域に捉えなければ、わからないことも多いと思う。
- ・福岡市における日平均気温の経年変化（資料4、p51）が示されているが、生物の生息環境への影響を考える場合、むしろ、夜間の最低気温の変化（上昇）を把握した方がよい（100年間で5.2℃上昇している）。
- ・また、水質経年推移図とその下の下水道普及率経年推移図など比較したいデータのグラフについては、相互に比較できるよう、年号を揃えたほうがよい。
- ・日本野鳥の会福岡では、ガン・カモ類の一斉調査を毎年1月に30年間継続実施しており、本戦略の検討にあたり、情報を提供することは可能である。

(浅野委員長)

- ・渡り鳥の中継地・越冬地であることや、タカ類の良好なモニタリングポイントがあることは、福岡市の生態系の大きな特徴である。鳥類の分析では、この点も評価してほしい。

(横山委員)

- ・住宅地が増えて自然地が失われてきたことが生態系に影響しているのだが、さらに、どのような地形、土地が失われたのかを把握すると、生態系の変化の要因を探る手がかりになるのではないだろうか。例えば、河岸段丘や扇状地（台地）を開発した場合と、沖積地（低地）を開発した場合とでは、生態系の機能が異なる。このような点に着目して、土地利用の変化に伴うエコシステムの変化を把握していくとよいと思う。

(小野委員)

- ・2万5千分の1地形図（明治33年作成、市街地部分のみ）、5万分の1地形図（明治33年作成）を参照すれば、開発される前の土地の様子が分かると思う。特に、自然堤防の分布を調べると参考になるのではないだろうか。

(矢部委員)

- ・資料4では、生態系サービスの評価に際し、農産物等の生産量の増減を参照しているが、生産量の増減は経済的要因に強く影響を受けるため、生態系サービスを評価する指標として用いるには、もう一工夫欲しいように思う。生態系サービスをどう評価するかは、難しい課題である。特に、文化的サービスを定量的に評価するのは難しいように思う。

(浅野委員長)

- ・現実には、生産地と消費地が異なることも多く、生態系サービスの定量的な把握は難しいと思う。例えば、福岡の名物である「シロウオ」や「あぶつてもも」でさえ、室見川、博多湾以外で採れたものがどのくらい持ち込まれているか分からない。

- ・厳密に定量的なデータを捕捉するのは不可能かもしれないが、定性的であっても、生態系サービスの概念を示すことは意義があると思う。

(服部委員)

- ・博多は魚がおいしいというイメージがあるが、博多湾で獲れるものはかなり種類が限られてきているように思う。博多の名物と言われるものについても、他の場所で捕られたものである場合が多い。
- ・事務局資料では、福岡市の生物多様性の分析にあたって、過去から現在に至る様々なデータを集めているが、過去のどの時代の環境を基準にして現在の環境を評価するのか、判断が難しいところである。
- ・また、都市開発により、山から海への水の流れが昔と比べてどのように変わったのかを把握するとしてみるのも、分析の参考になるのではないだろうか。

(荒井委員)

- ・他地域との連携の視点をもつことが重要だと思う。特に、哺乳類の場合には、個体数の増減を広域で捉えた方がよい。
- ・資料4のP88等で示している因果関係の矢印の向きや太さ等について、その根拠が不明確であり、何らかの基準を設けて検討する必要がある。

(荒井委員)

- ・「生物多様性」や「生態系サービス」という言葉を十分に理解している人はあまり多くないと思う。「生物多様性ふくおか戦略（仮称）」を策定する際には、この戦略を読んでもらう対象者層を設定し、用語の使い方に留意した方がよい。

(浅野委員長)

- ・今後実施予定の市民アンケート調査や福岡市の内部調整の際にも、「生物多様性」や「生態系サービス」という用語の使い方には留意した方がよいだろう。

(事務局)

- ・COP10の開催前に環境省が実施したアンケート調査において、約7割の人が「生物多様性」という言葉を知らないことが分かっている。生物多様性に関する市民の理解を促すことも、この戦略を策定する意義の一つであると認識している。また、行政内部でも十分に理解されているとは言い難いのが現状であり、庁内各部局に対しても生物多様性に関する理解を求めていかななくてはならないと認識している。

(浅野委員長)

- ・生物多様性というのは、守るべきものは守り、利用すべきものは利用するというスタンスの考え方である。いわば、「持続的に自然と共生する」ということであり、このことを明確に打ち出していくべきだと思う。庁内調整に際して一番の障壁は、生物多様性という考え方が、自然に手をつけないことを是とする自然保護のようなものと誤解されている風潮にあると思う。
- ・また、生態系というのはシステムそのものをいうのであり、常に変移し続けるものである。したがって、生態系を保全するという考え方そのものが成り立たないと思う。

(今田委員)

- ・今回策定するのは、「計画」ではなく「戦略」である。「戦略」ということの意味をどのように理解しておくかで、作られるものの内容が変わるように思う。

- ・また、「福岡市の活力の維持、向上に資するための長期的な成長戦略」とすることを戦略策定のねらいとしているが、これは、社会や経済を含むあらゆる視点から考察しなければ見出せない、非常に難しい課題だと思う。この点について、事務局ではどのように認識しているか。

(浅野委員長)

- ・この戦略では、通常の行政計画の常識からは考えられない50～100年という長期の目標期間を設定し、福岡市における生物多様性の理念を示そうとしている。10年ごとに戦略の見直しをするということにはなっているが、その対象となるのは戦略の内容のうち行動計画にあたる部分であり、戦略の根幹となる理念の部分は50～100年の間揺らがないものなる。この点において、本戦略は、福岡市のマスタープラン（総合計画）の下位に位置づけられるものではなく、むしろ、マスタープラン（総合計画）に示唆を与える性格のものであり、いわゆる行政計画とは趣が異なる。そういうニュアンスをもつ「戦略」であると理解していいのではないか。

(事務局)

- ・何をもって都市の成長とするのかは、考え方によって様々あると思うが、事務局としては、都市の活力や住みやすさなど、現在の福岡市の魅力を向上させることだと理解している。

(浅野委員長)

- ・都市の成長は、経済成長期と違って、GDPの伸びで一様に計ることができなくなってきている。コンパクトな都市構造が形成されている福岡市では、その利点を活かして自然との共生を図り、それによる生活の豊かさを育むことを都市の成長戦略と位置づけてもよいのではないだろうか。

(今田委員)

- ・福岡市には、ある程度自然を犠牲にしても、九州の経済を牽引する役割がある。このことを前提として、自然との共生を考える必要があるのではないだろうか。

(荒井委員)

- ・都市の発展を許容しながら自然を守るには、守るべき場所を明確にして、ゾーニングをするという方法が考えられる。

(浅野委員長)

- ・福岡市の重要な自然地域はある程度まとまって分布しており、立花山、宝満山・三郡山、油山、脊振、飯盛など、それぞれを一つのユニットと捉えることもできそうだ。

(小野委員)

- ・福岡市には多様な環境があり、全市をまとめて捉えることが難しい。特色によりゾーンで分けして、各ゾーンでそれぞれ、自然を保全するのか、再生するのか、創出するのかなど、方向性を検討した方がよいのではないだろうか。

(横山委員)

- ・都市の生態系を考える場合、自然地域と都市の内部を結びつける緑のコリドーという観点も大切である。緑のコリドーは、生物の生息環境を豊かにし、自然地域から都市に涼風を運ぶ風の道となり、快適な生活環境を創出する役割も果たす。

(浅野委員長)

- ・その意味では、福岡市には通称「緑の腕」と呼ばれる緑地帯があり、また、市街地にも緑地が点在している状況があることも考えると、まだ絶望的な状況には至っていないと思われる。しかし、「緑の腕」の一角である立花山の周りは急激に開発が進んでおり、緑地の減少が懸念される。

(小野委員)

- ・福岡市の深刻な環境問題の一つにヒートアイランド現象がある。公園、社寺林等のクールスポットを計画的に結び付けてコリドーを形成すると、ヒートアイランド現象の緩和に効果があると思われ、まちづくりの観点からの検討も必要と思われる。

(横山委員)

- ・福岡市は、市街地の背後に山があることが、良好な環境をつくる重要な要素になっている。山地の緑が守られている今のうちに保全策を検討しておけば、絶望的な環境破壊は免れると思う。

(浅野委員長)

- ・特に、事業者アンケートのとり方はよく検討した方がよい。環境報告書を出している事業者ですら、事業活動において生物多様性の考え方をどのように取り入れたらよいのか十分に理解していないのが現状である。「生物多様性」という用語を用いない設問設定の方法を考えた方がよいだろう。

(矢部委員)

- ・市民アンケートの設問は、生物多様に関する認知度などの一般的な情報を把握するとともに、本戦略の内容にかかる情報（例えば、〇〇山をコリドーに指定する是非など）を収集できるよう留意して設計したほうがよい。また、昔の福岡市の環境を知る人と知らない人とでは、回答内容に差異が出ることも想定されるため、回答者の属性（特に、在住歴）を把握するようにしてほしい。

(薛委員)

- ・目標期間を50～100年とする戦略であるので、例えばモニタリングなどに市民の協力を得ることも考える必要があり、市民の意識を将来にわたって維持することも重要な課題となる。この点にも参考となるような市民アンケートの設計をしてほしい。

(服部委員)

- ・「なぜ生物がいなくなったのか」を問いにしているかどうか。年代によって感じていることが違うと思うので、戦略を検討する際の参考になると思う。例えば、かつてはカブトガニは身近に接することができる生き物であったことなどを、浮き彫りにできるのではないかと。また、基礎調査においても、福岡市で絶滅した生き物について触れてほしい。

(事務局)

- ・市民アンケート調査には、「市政モニター」を活用することを予定している。調査内容については、第2回検討会において、案を提示したい。

(浅野委員長)

- ・九大の移転に伴って行われた一連の事業は、大変示唆に富んでいる。シンポジウムの開催が予定されているが、本検討委員会もこれに関与することを検討してほしい。

(薛委員)

- ・福岡市では、過去の環境影響評価の際に行われた自然環境調査のデータを蓄積していると思う。それら

のデータを集約して、戦略策定後のモニタリングに活用できないか。

(矢部委員)

- ・干潟では、活動を行うということなので、この委員会で報告してほしい。

(横山委員)

- ・事務局から説明があった「生物多様性と生態系サービスの変化の要因分析（資料4、p88～）」は、一般的な記述になっているようだが、是非福岡市ならではの特色が反映できるよう工夫してほしい。

(事務局)

- ・既存の自然環境調査のデータについては、本事業に関連して集約したいと考えている。
- ・次回検討会は、5月に開催予定である。

以上